
この世で一つだけのメリー＝クリスマス

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

この世で一つだけのメリー＝クリスマス

【Nコード】

N0695D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

彼女の未来に今年のクリスマスプレゼントをすることになった漫画家の光男。悩んだ末に彼が決めたプレゼントとは。七面鳥の面白いドイツ風クリスマスです。ギフト企画参加作品です。

第一章

この世で一つだけのメリー＝クリスマス

「もうクリスマスかよ」

遊佐光男はカレンダーを見て思わず唖った。もう十二月も終わりに近くなっていた。少し伸びた黒い髪が野暮ったい以外はごく普通の若者だ。歳は二十四である。

「そういえばやたらとクリスマスソングを街で聞いていたな」

「つてあんたどういう生活してるのよ」

隣にいる彼女の若宮未来が呆れて言ってきた。肩の辺りで切り揃えた茶色がかった黒髪がはねている大きな目の女である。歳は光男と同じである。

「クリスマスだつてもう十二月の最初からわかっていたじゃない」

「何せこんな仕事だから」

彼は今二人がいる自分の部屋を見回して述べた。見ればやたらとイラストや漫画があり側にはテレビゲームと攻略本が転がっている。二人が入っているコタツの上には食べかけの蜜柑とカップヌードルの汁だけ入ったもの、ついでに原稿用紙と漫画の道具がある。彼の職業は漫画家だったのだ。

「気付かなかつたんだよ」

「あんた、クリスマスもの描いているでしょう？」

未来は呆れてまた言う。そう言いながら光男のどてらを見る。それは如何にも冬らしい格好であるが少なくともクリスマスのもではなかった。

「何でそれで」

「それ描いたの十一月だからな」

彼は言う。

「完全に忘れていたんだよ」

「そうだったの。じゃあ今描いてるのは何時の季節の？」

「バレンタインだよ」

そう未来に述べる。

「随分先だろ」

「そうね。そんなに先だとは思わなかったわ」

未来も思わずそう言葉を返した。言葉を返しながらコタツの上にある蜜柑を一個剥いて食べはじめた。

「いる？」

「いや、いいよ」

一切れ勧められたがそれは断る光男であった。

「もうすぐ終わるから。それまでは」

「そうなの。それにしてもあれよ」

未来はその蜜柑を食べながら彼に言う。

「クリスマスはもうすぐなのは事実だから」

「わかってるさ。そうか、クリスマスか」

「仕事それまでに終わりそう？」

未来は今度はそれを尋ねてきた。

「どうなの、そこは」

「一応今年の仕事はこれで終わりだけれどさ」

彼は今描いている原稿を描きながら答えた。

「それで。何だよ」

「クリスマスプレゼントのこと考えてる？」

未来が聞きたいのはそれであった。それを今尋ねてきたのだった。

「どうなの、そこは」

「ああ、そうだったな」

それも言われてやっと思い出した感じだった。

「クリスマスだから。そうだよな」

「そうよ。それで今年は何？」

未来はまた尋ねた。尋ねながらまた蜜柑の皮を剥いている。

「去年みたいにマフラーとか？私は別にそれでもいいけれど」

「いいんだ」

「別に何が欲しいってわけじゃないし」

そういうことには結構淡泊な未来であった。あまり欲のないタイプなのだ。

「それでも真心は欲しいかしら」

「それって結構難しいくないか？」

光男は真心と聞いて首を傾げながら述べた。

「かえってわからないんだけれど」

「とにかく心の籠ったものが欲しいのよ」

未来が言いたいのはそこであった。

「それでいいかしら」

「わかったよ。僕もそういうのが欲しいんだけれど」

「任せておいて」

ここでのんびりと笑う未来であった。蜜柑の袋を右手に楽しそうに笑う。

「もうとっておきのを用意してあるんだから」

「そうなんだ」

「後はあんたよ」

そのうえで彼に言う。

「わかったわね」

「わかったよ。じゃあ何か考えておくよ」

「期限はクリスマスまで」

これはもう規定事項であった。クリスマスプレゼントにそれより遅れては何にもならない。これについてはもう言うまでもないことであった。

「わかったわね」

「わかってるさ。フレーミングもなしだよね」

「勿論」

クリスマスプレゼントはここが難しい。クリスマスより前でも後でも渡す日は駄目なのだ。クリスマスでなければ駄目なのである。ここが重要なのだ。

「それじゃあいいわね」

「わかったよ。じゃあクリスマスにね」

「期待してるから。あんたも期待しておいて」

未来は蜜柑を食べ終えて言う。

「いいわね。とりあえずは」

「とりあえずは」

「これ。あげるわ」

蜜柑を一個剥いて。それを彼の側に置くのだった。

「仕事が終わったら食べて。それでいいわね」

「ああ、有り難う」

剥かれた蜜柑を前にして礼を述べる。

「じゃあ後で食べるよ」

「ええ、それじゃあね」

そこまで言うのとコタツから出て立ち上がる。赤いセーターに黒いミニスカート、そのスカートの下に黒いズボンを履いている。そこに白いコートを羽織るのだった。中々さまになっていた。

「今日はこれでね」

「泊まっていけないの？」

「こつちもそれであるから」

クリスマスプレゼントのことらしい。それについて言う。

第二章

この世で一つだけのメリー＝クリスマス

「さよなら。またね」

「うん。それでクリスマスはさ」

「もうこつちでお店予約取っておいたわよ」

未来が言ってきた。

「そんなことだろうと思ったから」

「早いね」

「全く。そういうところは全然なんだから」

また呆れた顔になって光男に言うのだった。

「プレゼントは忘れないでよ。いいわね」

「わかってるよ。今頭の中に入れたから」

光男は笑って答える。

「じゃあクリスマスにね」

「ええ、またね」

こうしてこの場は別れた。光男は未来が帰った後でその今年最後の仕事を終わらせた。それをファックスで雑誌の編集部に送った後でコタツに戻り蜜柑を食べながら思うのだった。今さっき未来が自分の為に剥いてくれた蜜柑をである。

「さて、何にしようかな」

それが問題であった。

「プレゼントといっても」

一口に色々とある。だからこそ悩んでいるのだ。

まず考えたのは何かを買う。だがこれも何かと思うのだった。

普通にマフラーやセーターもオーソドックスだ。それでもいいが今回は少し趣向を変えてみたいと思ったのだ。それが彼の今の考えであった。

それで彼は思った。何か変わったものにしよう。

しかしそれでも問題があった。変わったものといっても実に様々

だ。何でもいいというわけではない。ましてやクリスマスだ。贈り物自体がかなり限られてもいた。だからこそ彼は悩んでいたのだ。一体何を贈るべきか。結論が出ないのだった。

暫くあれこれ考えたが結論が出ない。結論が出ずに考えが煮詰まってきた。こうなると余計に考えが出なくなるのが彼の性分であった。

それでどうしようもなくなって遂に一旦休みに入った。買っていた缶のカクテルを出して飲みだしたのであった。

「さてと」

何本か飲んでいると次第に落ち着きだした。そうして酔った頭でまた考えに入るのだった。酒のせいかなりリラックスして考えることができるようになっていた。

「何にしようかな」

また同じことを考えるのだった。

「お金はあるけれど。それでも」

何にするかは考えがつかない。どうしてもだ。

それでまた飲んだ。飲めば飲む程酒が回る。そうしてふと部屋の周りが目に入った。そこで彼が見たものとは。

「あれっ」

壁に資料の一つとしてかけてあったポスターだ。冬のサンタの格好のキャラクターポスターである。雑誌編集部からの貰いものである。

「サンタか」

それを見てふと思うのだった。それで悩んでいるから余計に目に入るのだった。

ふと思ったただけだったがそれが考えに至るのはすぐだった。考えてみると何もお金をかける必要はない、それも考えだしてきていた。

「お金がなくてもできるな」

そのうえで彼は仕事道具を取り出した。それもカラー用のである。これには理由があった。

「ええと、確か」

誰かを思い出しながら下書きをしていく。かなりアルコールが入ってしまっているがそれでも下書きは上手く進む。そうして次の日も合わせて何かを書き終えたのだった。それを書き終えた彼は満足した顔でコタツに座っていた。

「これでよし。かな」

そう呟いた。そこにあるのを見て。

「後は。クリスマスになるだけだな」

カレンダーを見る。最近滅多に見なかつたしそもそも存在していることさえ忘れていたが今回は充分覚えていたのだった。というよりは未来に言われてやっと思い出したのだった。

そのカレンダーを見て満足した笑みを浮かべる。そうしてクリスマスに備えて身支度を整える。彼も後はクリスマスを待つだけであつたのだ。

第三章

クリスマスになった。本当に時間は待たないもので何をしてもクリスマスもやって来るのだ。彼は夜になるとアパートを出て待ち合わせ場所に向かった。当然今できる限りで最もいい服を着ている。そうして待ち合わせ場所のデパートの前まで来るともう普段より三割化粧を決めて着飾っている未来がいたのであった。

「待った？」

「いいえ」

未来はにこりと笑って光男に答えてきた。それは本当のこのように彼女の笑みは余裕のあるものであった。

「今来たところよ」

「そう、よかった」

光男はそれを聞いてまずは安心したのだった。

「それじゃあその予約取っている」

「レストランよ」

未来はそう答えた。

「ドイツ料理の。それでいいわよね」

「ドイツ料理なんだ」

「何かおかしいかしら」

光男の言葉の調子が少し微妙なので彼に尋ね返した。

「ドイツで」

「いや、イタリアじゃないんだなって思って」

光男が思ったのはそこであった。実は未来は無類の Pasta 好きであり一週間に一回は食べているのだ。その彼女がイタリア料理でないのが少し変わっていると思ったのだ。

「私だっていつもイタリアじゃないわよ」

それが未来のコメントであった。特に思い入れはないようである。「たまにはね。ドイツもいいじゃない」

「ドイツねえ」

光男は彼女のドイツという言葉にふと考えたのであった。イタリア料理は結構色々と考えつくのだがドイツ料理となると。思いつくものがあまりにも限られていた。

「ハンバーグとか？」

「嫌いじゃないわよね」

光男に問い返してきた。もう二人は歩き出している。見れば光男が黒いコートとスーツで未来が白いコートに赤い上着と白のロングスカートだ。実に対比的である。

「いつも食べてるし」

「うん」

未来のその問いに頷いた。実際に彼はハンバーグが好きである。

「じゃあいいじゃない」

「後はジャガイモにソーセージかな」

「ええ、それよ」

それしかないとも思った。ドイツ料理といえば本当にジャガイモとソーセージだ。まずこれは外せない。あまりにも予想通りであった。

「あとザワークラフトと」

「クリスマスかなあ、それって」

「ローストチキンばかりじゃあれじゃない」

未来はまた言う。

「だから趣向を変えてね。何なら鶏だって」

「頼めるか」

「そういうこと。それに何より」

ここで未来の顔が満面の笑みになった。それには充分な理由があった。それは。

「ケーキとワインが」

「あっ、そうか」

ここで光男はやっとわかった。何故彼女が今回に限り趣向を変え

たのか。そうした理由があつたのだ。素晴らしい理由が。

「その二つで決めただ」

「そうよ。やっとなつたわね」

やっとなつた光男の顔を見て笑っているような、それでいて困っているような、苦笑いとはまた違った複雑な顔を見せてきたのであつた。

「どうしてドイツにしたのか」

「うん、それなら」

「やっぱりケーキとワインよ」

どちらも大好きな未来らしい言葉であつた。

「特にクリスマスなんだしね」

「クリスマスだからなんだ」

「そうよ。それで」

ここで彼女は話を本題に向けるのであつた。目の色が一変した。

「持って来たわよね」

「勿論」

光男ははつきりと答えたのであつた。

「とびきりのをね」

「私もよ」

未来は自分の鞆を見ながら笑うのであつた。どうやらそこには彼女の自慢のプレゼントがあるらしい。その笑みでそれがわかる。

「期待しておいてね」

「君もね」

光男は光男で自分の鞆を見る。黒い大きな鞆であつた。

「僕のも期待していいから」

「随分強気なのね」

未来は光男のその言葉に面白そうに笑つた。

「いつもよりもずっと」

「それだけのものだと思うから」

本当に自信に満ちた笑みを見せるのだった。

「苦労したし」

「私だつて苦労したわよ」

未来も同じ言葉で彼に返すのだった。

「それもかなりね」

「何かお互い苦労したみたいだね」

光男は彼女の言葉も聞いて何かそうした気持ちになった。別に苦労しなくてもいいのにあえて苦労をした、そうしたプレゼントなのだなとも思った。

「けれどそれがね」

「ええ。プレゼントのしがいがあるわ」

未来は言う。

「私もね。光男君もでしょ」

「そうかも。多分未来ちゃんと同じ気持ち」

光男もそれを認めるのだった。

「それじゃあその同じ気持ちで」

「楽しい時間を過ごしましょう」

「クリスマスのね」

そう話をしてそのドイツ料理の店に行く。まずは簡単なサラダとジャガイモのコンソメスープが出る。サラダはともかくスープにジャガイモが入っているのはまたドイツらしくった。

第四章

店の雰囲気は静かなものである。客が多いがそれでも静かだ。クリスマスツリーはかなり大きく当然ながら装飾もあるが何故かそれも大人しい。見ればツリーは本物のモミの木であるが別にそれが違和感があるわけではなかった。何故かそれもこの店の中に合っていた。

店の中も落ち着いている。モノトーンのように落ち着いた色の中にあり椅子もテーブルも床もしっかりとした檜の木であった。それもまた実にドイツらしいものであった。流れて来る曲もよく聴けばドイツ語である。かなり本格的な店であると言えた。

「いいでしょ、このお店」

未来は光男の向かい側の席に座っている。そこから笑顔で彼に問うのだった。

「本格的で」

「そうだね。本当にドイツに来てるみたい」

「当然よ。だってここのオーナー本当にドイツ人なんだから」

「へえ」

光男はそれを聞いて意外といった声を出すのであった。

「そうだったんだ、本当に」

「そうよ。料理もそう」

今度は料理を指摘してきた。

「例えばね。これ」

ここでソーセイジとジャーマンポテトが出て来た。同時にワインも。ワインは白であった。

「ワインだけだね」

「ドイツのだよね」

「そうよ。確かこれは」

未来はボトルのラベルを見る。ドイツ語であるが何とか読みきつ

たのであった。

「グラーハ＝ヒンメルライヒ＝シュペートレーゼ」

「長い名前だね」

「そうなの。とりあえず事前にネットで調べてこのお店のお勧めのワインを頼んだのだけれど」

「それがこれなんだ」

光男もそのグラーハ＝ヒンメルライヒ＝シュペートレーゼを見て言う。

「こくのある料理向きだから肉料理にもいけるわね」

「ビールだともつとよさそうだけれど今はね」

「そう、クリスマスだから」

そういうことであった。ドイツ料理でありしかも出て来ているのがソーセイジにジャーマンポテトであるからここはビールといきたいがあえてワインとしたのはやはりクリスマスだからであった。二人も今日ばかりはかなりこだわっていた。

「折角だけれど」

「赤だともつとよかったかな」

「どういうわけか白が多いのよ」

未来は首を傾げさせて光男に答えるのだった。

「ドイツのワインって。何故かしらね」

「そうなんだ」

「それに甘口」

これについても首を傾げさせる。

「産地の関係だと思っけれどどうやらそうみたいなのよ」

「ふうん」

光男はそれを聞いて頷くだけだった。その間に二人のグラスにそれぞれワインが注がれる。注いでいるのは未来であった。

「まあ飲んでみましょう」

最初に光男のものに入れて次に自分のものに入れてから言うのだった。

「飲んでみないと」

「うん、それじゃあ」

「メリークリスマス」

二人はグラスを合わせた。そうしてまずは一杯飲む。飲んだワインは。思ったよりも美味かった。

「いいじゃない、これ」

「ええ」

二人は笑顔で頷き合う。

「甘くて飲みやすいし」

「そうよね、それに」

未来も言う。

「お料理にも合うし。何かどんどんいける感じ」

「本当にね」

二人はそれぞれソーセージとジャーマンポテトを食べながら言い合う。七面鳥も赤ワインもなかったがこれはこれでかなり満足のいくものであった。

そのままハンバーグが来てこれも食べて。その頃にはもう二人共一本綺麗に空けていた。かなり飲むのが早いと言えた。

「いいんじゃない、これって」

「そうだよ。次は何を頼んでいたっけ」

「アイスバインだけねど」

豚の足を煮たものである。今二人はザワークラフトを食べている。これもまた実に美味しいものだ。

「それでいいわよね」

「いいよ。何かそれを食べてワインをもう一本ずつ飲んだら」

「もう満腹ね」

未来はワインで赤らんだ顔で笑った。

「でしょ、光男君も」

「未来ちゃんもだよ」

「後でケーキを食べたらね」

この世で一つだけのメリー＝クリスマス

しかし未来はそれを忘れてはいなかった。クリスマスといえはワインにプレゼントにこれは欠かせない。七面鳥は他のもので代えられてもこの三つは駄目である。

「それで満腹よ」

「ケーキもあつたんだ」

「それもいけるわよね」

未来はそう光男に尋ねるのだった。

第五章

「まさかとは思っけれど」

「いけるよ」

光男の返事も決まっていた。

「当然じゃない。だから」

「頼んでるから。いいわね」

「うん。アイスバインが来たよ」

ここで巨大な豚の脛が出て来た。アイスバインとはこれ香辛料や野菜と共に塩茹でにしたものである。切ってマスタードをつけて食べるのだ。

「ほら」

「ええ」

テーブルの上にそれが置かれた。圧倒的なボリュームを二人に見せ付けてきた。光男はそのボリュームを見て満足した笑みを浮かべながら未来に言ってきた。

「食べられるよね」

「勿論よ。少ない位よ」

「じゃあもつと頼む？」

これは本気である。光男も言った。

「それなら。ジャガイモのパンケーキいく？」

「そうよね、それもあつたよね」

言われてそれも思い出す未来であった。アイスバインを切りながら応える。

「それなら。頼むわよ」

「うん」

光男も特に反対することなく答える。

「僕のもね」

「漫画家なのにかなり食べるのね」

「それでも運動もしているからね」

光男は素直にそう答えた。

「だからいつもお腹が空いて」

「そういえば水泳しているんだっけ」

「うん」

見れば光男は案外スマートな身体をしている。食べて漫画家という動かない仕事をしているというのにそんな身体でいられるのにはちゃんとした理由があるのであった。

「だからいけるよ」

「そうなんだ。それじゃあまた一緒にね」

「うん」

「それにしてもこのアイスバインって」

ここで未来は自分が切ったアイスバインを口に入れる。見れば彼女はマスタードをつけて食べていた。アイスバインの標準的な食べ方と言える。

「美味しいわね」

「そうだね」

光男も切って食べている。そうして二人で楽しく食べているのだ。彼もマスタードである。そうして茹でたてのアイスバインを二人で楽しく食べていた。

「意外とあっさりしているし」

「塩茹でのせいね」

未来はそう答えた。

「だから美味しいのよ」

「ソーセージとかよりもあっさりしているかな」

光男はアイスバインをさらに食べながら思った。もう既にザワークラフトやソーセージ、ハンバーグとかなり食べているのだがそれでもまだ入るのだった。

「だからもつと」

「食べられるわよね」

「ワインにも合うしね」

ワインの種類はそのままだ。楽しく飲んでいる。

「いや、ドイツ料理も」

「いいでしょ。それで終わりは」

「ケーキだよな」

「そういうこと。それでね」

話がようやく本題に入った。クリスマスの本題である。

「わかっているわよね」

「プレゼントだよな」

「ここを出してくれるの？」

「そのつもりだけれど」

光男は少しワインを飲みながら答えた。その飲み方も実に美味しそうであった。

「未来ちゃんは？」

「私もよ」

未来もにこりと笑って言葉を返すのだった。

「そのつもりよ」

「じゃあ同時に出す？」

光男が沿う提案してきた。

「それで」

「いいわね、じゃあそれでね」

未来もそれに乗ってきた。これで話は決まりであった。

こうして二人は食べた後で同時に贈り物を出すことになった。それで話は進む。まずはアイスバインもパンケーキも食べ終えた。そうしてワインもケーキも終わったところで遂に贈り物の時間となったのであった。

「私のは特別よ」

まずは未来が満面に笑みを浮かべる。そのすっかり酔った顔で。

「凄いの持って来たんだから」

「僕だってそうさ」

それは光男も同じであった。彼も笑っていた。

「とっておきを持って来たから」

「どんなの？それって」

「それは見てからのお楽しみ」

あえて今は隠して告げた。

「凄いのだけは確かだけれどね」

「ふうん、自信があるのね」

それはわかる。わかるからこそ未来も笑みを浮かべ続けていた。

だがそれ以上に彼女は自分の贈り物に絶対の自信がある。そうした
笑みであった。

第六章

「まあこうというのは勝負事じゃないけれど」

「何か勘違いしているような」

「それは気のせいよ。そう思っ」

未来はそう言い繕う。

「わかったわね。じゃあ一、二の三で」

「出すんだね」

「そうよ。じゃあ」

未来が言う。彼女も光男ももう側に置いていた鞆からそれぞれの贈り物を出している。そうしてそれを自分の背中に持って隠しているのであった。合図と共に出すつもりなのは言うまでもない。

「一、二の」

未来が音頭を取る。そうして。

「三っ、はい」

「これ」

二人は同時にそれぞれの贈り物を出してきた。それは。

未来はセーターであった。青い毛糸のセーターであった。

それに対する光男のものはというと。これには未来も驚いた。

「何、それ」

「頑張つて描いたんだ」

にこりとした笑みで未来に答えた。

「時間があつたからね」

「そうだったの。けれど」

まだ驚きを隠せない。その顔でまた言うのだった。

「それ、私よね」

「そうだよ」

未来の言葉にまた答えるのだった。やはりにこりとした笑みは変わらない。

「どうかな。衣装も」

「そうね。気に入ったわ」

自分のイラストを見ながら答える。そこに描かれているのはミニスカートのサンタの衣装を着た彼女自身であったのだ。右手には袋を持って笑っていた。

「こんな私だなんて」

「どうしようかと思ったんだ」

「そもそも彼女に告げる。」

「何か買おうかなって思ったけれど。それも何かな、とか思って」

「それで描いたの」

「うん」

「そう彼女に述べるのだった。」

「色々考えたけれどね。この季節だし」

「いいじゃない」

未来は満面の笑顔であった。その笑顔こそが何よりの証であった。

「有り難く頂くわ」

「有り難う」

「それで私もね」

未来は何かかなり負けた気になっていたがそれでも自分のセーターを差し出す。その青いセーターを。

「これだけれど」

「何か温かそうだね」

「冬で寒い色だけれどね」

未来はそれが少し申し訳なさそうだったがそれでもこのセーターを気に入っている感じであった。それはどうしてかというとはっきりとした理由があった。

「青好きだったよね」

「うん」

光男は笑顔で答える。

「大好きだよ」

「そう言ってくれらると思つたから」

それが理由であつた。

「よかつたわ」

「この青いセーター着てもいいんだよね」

「勿論よ」

その為に編んだのだからこれは当然であつた。しかしそれを實際に言葉に出してくれること程嬉しいこともないのであつた。

「是非着てね」

「うん。僕のポスターは」

「この世で一つしかないのよね」

「そうだよ、未来ちゃんも編んでくれたセーターと同じ」

光男も笑顔になつていた。その笑顔で述べるのだった。

「この世で一つしかないよ」

「それじゃそれを壁に飾らせてもらつわ」

それが彼女の返事であつた。

「喜んでね」

「何か。凄くいいクリスマスになつたね」

光男はその笑顔のまま未来に言つた。

「こんないいクリスマスになるなんて」

「そうね。これってやつぱり」

「神様のおかげかも」

そう言つてクリスマスツリーを見る。ツリーは何も語らずそこに立っているだけである。しかし立っているだけで充分なものがそこにはあつた。

「だから僕達は」

「感謝するべきよね」

「そうだね。だから」

未来の顔を見て。そして言う言葉は。

「メリークリスマス」

「メリークリスマス」

この世で一つだけのメリー＝クリスマス

二人共同じ笑顔だった。その笑顔で言い合っただった。

この世で一つだけのメリー＝クリスマス 完

2007・11・5

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0695d/>

この世で一つだけのメリー＝クリスマス

2009年3月24日09時00分発行